



Title	短期海外研修プログラムにおける参加者の体験と意識 変容 : 参加者に対するPAC分析の結果より
Author(s)	渡部, 留美
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学留学生センター 研究論集. 2009, 13, p. 15-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50652
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

短期海外研修プログラムにおける参加者の体験と意識変容

— 参加者に対するPAC分析の結果より —

渡部 留美*

要 旨

本稿では、三週間程度の海外研修プログラムが参加学生に及ぼす意識変容とプログラムの効果について知ることを目的に参加学生に対して行ったPAC分析の結果を報告する。参加学生に対し、研修参加前後に留学・海外研修についてのイメージを連想させ、その背景にある体験や意識などを聴取した。その結果、自己や自文化への振り返りが起こり、積極性や学習意欲の向上などの意識変容がみられ、様々な体験を通じた異文化接触がその促進要因となっていることが推察された。

【キーワード】 短期海外研修プログラム、PAC分析、異文化接触、意識変容

1 はじめに

1-1 研究の背景

近年、日本から海外の大学等に留学する学生が増加しており、その目的、期間、留学先地域が多様化している。文部科学省においても海外の大学等において学位取得を目的とする学生のための「長期海外留学支援」、日本の大学等に在学する学生が大学間協定等に基づく交換留学を行うための「短期留学推進制度」など積極的に海外留学に関する支援を実施している。海外に留学している日本人は8万人超となっており（文部科学省、2007）、「協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」によると、平成18年度1年間で所属大学が締結している海外の協定校などへ派遣された日本人学生は、23,633人にのぼる（JASSO、2008）。このうち、留学期間が1か月未満の者は10,420名で、いわゆるサマープログラム、短期語学研修、フィールド・スタディなどといったプログラム（本稿では、海外研修プログラムあるいは海外研修と呼ぶ）などを利用して海外に出かける学生が半数近くを占める。ある調査では、80%近くの大学が海外研修を実施しているという（矢内、2007）。

1年間の長期留学では、語学能力の向上、専門知識の習得、研究活動など留学する学生本人の目的が明確化されている場合が多いと考えられ、留学の効果としては、対人ネットワークの拡大・拡充という報告もある（高濱、2006）。また1セメスター（3-4か月程度）の中期留学では、言語面では、特にリスニング、スピーキング能力の向上などの効果があると報告されている（藤澤・小森、2005；野中ほか、2001）。一方、1か月未満の海外研修プログラムは、「英語を学ぶことに対するモチベーション」、「自主性、社会問題に対する意識」（古屋、2005）の発現、英語使用不安の低下（大塚、2007）、あるいは「多様な情動変化と態度変容」（中川、2008）をもたらす効果があるという調査結果があり、藤澤・小森（2005）は中期留学と比べて「滞在期間中に遭遇するさまざまな出来事や現地の人との出会いを通して、いわゆる『異文化理解』を深める体験が得られる」と述べている。また徳井（2002）は異文化間能力の育成、コミュニケーション意識の変化の効果があるとしている。すなわち、海外研修プログラムは、知識の習得や語学能力の向上よりも、参加者が短期間のうちに異文化に接することによって起こる何らかの内的意識変化が期待できると考え

* 大阪大学大学院人間科学研究科 特任助教

られているといえる。

1-2 本稿の目的

現在大阪大学では複数の海外研修プログラムを実施している。プログラムのいくつかは参加者に対し研修後に報告書の提出を義務付けているが、プログラムの効果や意義について本格的に調査したものはない。大学の国際化戦略の更なる推進に向け、将来的に海外研修プログラムの増設が期待されるなか、現行のプログラムについて調査研究を行うことは不可欠であろう。

本稿では現行プログラムの一つである「オランダ・グローニンゲン大学訪問プログラム」¹を取り上げ、参加者を対象に行った調査から、プログラムの効果と意義について述べる。本プログラムの目的は、「短期間の試験的な留学の機会をあたえる」、「ヨーロッパの文化や社会を現地で学びつつ、英語での授業を実際に経験させる」、「将来における本格的な留学への動機づけをあたえる」とされているが、これらの機会を提供された参加学生が、どのような動機を持って海外研修に参加しているのか、実際に現地でどのような体験をし、意識変化が起こったか、さらにはプログラムへの参加がどのような効果を個々にもたらしているのかについて知る手段はなかった。そこで、参加者がもつ研修前、研修後の留学・海外研修プログラムのイメージとその背景にある個々の多様な経験や出来事をインタビュー形式によって探る。特に、研修後に得られたイメージを分析することによって、異文化接触がもたらす内面的意識変化とプログラムの効果や意義が明らかにできると考える。

留学や研修の効果についての先行研究のうち、イメージに焦点をあてたものは、派遣先国についてのイメージ（末田、2001）、派遣先国の国民に対するイメージ（徳井、2002）、参加したプログラムについてのイメージ（中川、2008）がある。本研究では、幅広く「留学」、「海外研修」について持つイメージを問うこととした。

1-3 研究に用いた手法

本研究で用いる研究手法は、PAC 分析実施法（以

下 PAC と略記）である。PAC とは Personal Attitude Construct（個人別態度構造）の略である。内藤（1993、2002）により開発された技法で、「当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」である。実際の手続きを詳述すると次のようになる。

- 1) 調査者から調査協力者に連想刺激文（○○についてのイメージ等）が提示される。
- 2) 調査協力者が刺激文から思いつく単語や文章を一つにつき一枚のカードに書く（カードの枚数は制限なし）。
- 3) 調査協力者がカードを重要な順に並べる。
- 4) 調査者がカードをランダムに 2 枚ずつ選び、二つの調査協力者に二つのイメージの近さを直感的に 7 段階（非常に近い(1)～非常に遠い(7)）で評価してもらう。
- 5) 4) で得られた類似度距離行列に基づきクラスター分析（ウォード法）を行い、デンドログラム（樹形図）を出力する。
- 6) 調査者がデンドログラムに基づいたインタビューを調査協力者に対し行い、各クラスターや各項目についての解釈や背景について説明を受ける。
- 7) 調査協力者にクラスターごとに名前をつけてもらい、各項目のイメージを直感的にプラス（+）、マイナス（-）、どちらともいえない（0）で答えてもらう。
- 8) 調査者による全体的な解釈を行う。

PAC を使用した研究はこれまで、外国語の学習者、学校教師、子供を持つ母親、就職活動を行う学生などを対象としたものなど多岐に渡っており、カウンセリングなどにも応用されている（井上、1998）。末田（2001）は PAC を使用する利点として「量的研究及び質的研究それぞれのメリットを掛け合わせたもの」、「調査者は調査協力者の枠組みを用いて、調査協力者の体験を理解しようとする」、「調査協力者の報告及び

その解釈はデンドログラムに基づいているので、再現性が高い」の三つ挙げており、その有効性、信頼性を検証している。2007 年度に「PAC 分析学会」が発足し、2008 年 12 月に第 2 回大会が開催された折には様々な研究分野からの発表がなされ、今後発展の可能性のある研究法である。

2 方法

2-1 調査協力者

本稿で対象とした調査協力者は先に挙げた大阪大学主催の海外研修「グローニンゲン大学短期訪問プログラム」に参加した 3 名（A、B、C）である。協力者は、海外研修プログラムの効果を見出すという本稿の目的が最大限に引き出されることを期待し、これまで海外滞在経験や異文化体験の少ないと考えられる低学年である 1 年生、2 年生に限定し、そのうち長期間（半年以上）海外滞在経験のある者は除き、且つ人文科学系学部の学生を対象とした²。そうした条件で抽出した学生 6 名に各自電子メールを送り、今回の調査研究の趣旨を説明し、研修前と研修後の 2 回調査の協力が可能なこと、研究結果は個人が特定されないように細心の注意を払いつつ公表する可能性のあることを述べ、研究に協力いただける場合は返信するよう依頼を行った。その結果、3 名から調査協力の申し出を得た。3 名とも女子学生であり、A と B は学部 2 年生、C は学部 1 年生である。渡航経験は、A は高校時代に修学旅行でオーストラリアへ数日間滞在し、B は大学入学後台湾へ観光旅行に出かけ、C は高校時代に修学旅行で韓国に数日間滞在した経験をもつ。B、C とも将来的に半年間以上の長期留学をしたいという希望を持っていた。

2-2 調査の手続き

調査時期は、研修前の 2008 年 7 月上旬～8 月上旬と研修後の 9 月下旬～10 月中旬である。上述した従来の手続き方法であれば、一回につき 1～2 時間要し（内藤、2002）、調査協力者には過度の心理的、体力的負担がかかると考えられる。これらの問題を少しで

も解決するために開発されたのが、土田の PAC 分析支援ツール（PAC-assist）である（図 1）。このツールを使用すれば、1-3 で説明した 1）～4）の手順をパソコン上で行うことができる。特に 4）の作業では、カードがランダムに自動的に提示されるため、時間の短縮、カードの組み合わせの正確性にも繋がることから PAC-assist を利用した。³

連想刺激文(テーマ)			
あなたにとって海外での研修・留学とはどのような意味を持ちますか。思い浮かぶイメージを単語や文章でいくつでも書いてください。			
自由連想語(文)	重要度	備考	
想起順に上から記入			
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			

重要度が1位から順に並び替え 2対比較を2回行わない 比較開始

図 1 PAC-assist

協力者には以下のような連想刺激文を提示した。
「あなたにとって海外での研修や留学とはどのような意味を持ちますか。連想する言葉や文章を思い浮かべただけ挙げてください」

デンドログラムを用いたインタビューでは、調査協力者本人の了解を得て IC レコーダに録音した。

3 結果

それぞれの調査協力者に対し、クラスター分析の結果出されたデンドログラムをもとにその解釈をたずねた。それぞれのデンドログラムとクラスター（CL）ごとの解釈を提示する。各項目の解釈については本稿末に掲載する。総合的解釈にあたっては、調査協力者の枠組みで解釈するなかで、補足が必要な場合は、筆者が本プログラム実行前や同行中に観察された出来事や知見によって補いながら考察を行う⁴。

3-1 A についての PAC 分析

A の研修前と研修後のデンドログラム（図 2、図 3）とクラスターごとの解釈を以下に示す⁵。

3-1-1 A（研修前）

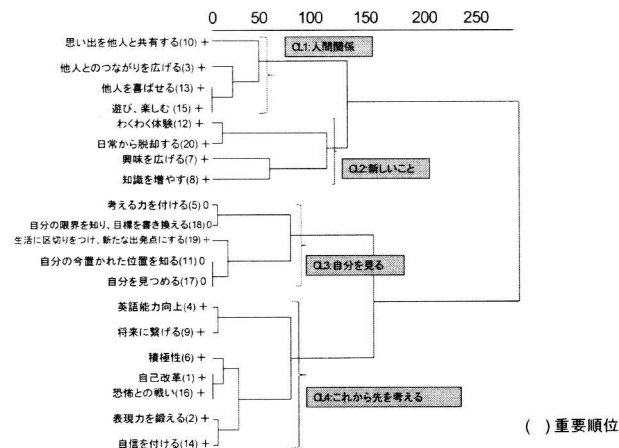


図 2 A（研修前）のデンドログラム

【クラスターごとの解釈】

CL1（人間関係）：上の二つの他人ていうのは、自分と一緒に研修を受ける人と向こうで出会うオランダの方。下は今の生活のうえでお世話になっている、家族なり、親戚なり友人なり。とりあえず周囲にいる人と、もっと積極的にコンタクトが取れるようになっていう意味です。

CL2（新しいこと）：全然違うところに行くので、そのなかでどんな楽しみとか、未知の世界にひかれる。ちょっとチャレンジ的な部分だと思います。

CL3（自分を見る）：全然違うところに行くことで、自分ていうのがどんな人なのか、欠点があるのか。自分を変えたいという気持ちもあるので。パニックにならずに考える力をつけて。次に繋げたい感じです。

CL4（これから先を考える）：英語を一応、重視して学んでいくので、その辺は、将来仕事とかにもつなげるきっかけにもしたい。能力云々というよりも引込み思案ということで。せっかく英語を使う機会に、もうちょっと克服したいという気持ちです。

3-1-2 A（研修後）

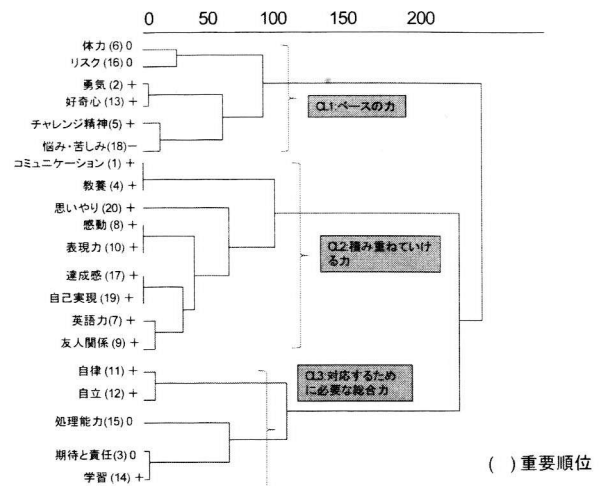


図 3 A（研修後）のデンドログラム

【クラスターごとの解釈】

CL1（ベースの力）：鍛えるのも鍛えるけど、自分が持っている力として、留学とかで必要になってくるものなのかなって、今回感じました。

CL2（積み重ねていける力）：これは、1 番と対比すると、どっちかっていうと体力というよりはあとから自分で作っていくもの、として、持っているものも大事だけど、あとから塗り重ねていく感じで。それを達成したりしたら自己実現にも繋がるものかな、と思われるものです。

CL3（対応するために必要な総合力）：これは、1 と 2 をひっくるめて総合的に、何か未知の状況に至ったときにどうしたらいいとか、自分ひとりで対応する力。

3-1-3 A についての総合的解釈

全体として、研修前は周りの人間関係についての言及や自分の可能性や限界を知り、そこから何かを得ようとするのを重要視していたのに対し、研修後は留学や海外で研修するにあたって必要なもの、得られるものを挙げている。

研修前の動機と背景

研修参加申し込み時の資料によると、A は比較的高い英語能力を持っており⁶、筆者が接した限り真面目

で勤勉な印象を受ける。少なくとも語学面においてはある程度の自信を持っていると考えられるが、反面、「積極性に欠ける自分」、「引っ込み思案」というイメージを自己の中に持っていた。そのことを家族に指摘されつつも、日常的に忙しい身にはなかなか脱却することができないし、「与えられたことをやってきた」感がある。2年生の半分まで来て「ちょっと今までのやり方ではいけないかなと思っている」。今回の研修では、「家族とかおらんとこで」日常生活から脱却し、「やむをえない状況に追い込まれ」たり、恐怖と戦ったりし、自分の限界を知り、「自分を見つめ」、自己を改革すること、また家族の期待に応えることが重要だと考えていたことが読み取れる。さらに、Aからは「時間がない」、「忙しい」という言葉が頻繁に聞かれ、研修先という家族もいない、時間も十分ある状況のなかで新しい自分を見つけ、将来に繋がたい、そのためには自分の持っている英語能力をさらに向上させることが不可欠であり、留学や海外研修はそれを実現することができる手段だと考えていたと推察される。

英語能力とコミュニケーション能力

研修後のAの留学や海外研修のイメージはかなり変化したといってよく、命名された各クラスターは、「ベースの力」、「積み重ねていける力」、「対応するために必要な総合力」であり、各項目についても、ほとんどがスキル、能力、知識といったものであった。Aは、研修前は、オランダ人学生や他国の留学生との交流が一つの「恐怖との戦い」であると感じていたが、現地での体験を通して自分の限界を知るきっかけとなったようである。Aは、現地にいる外国の学生との会話に臨んだ際に、相手の言っている英語は理解できたのに、会話が続かなかったという。唯一自信のあった英語能力が役に立たないことに気付かされ、自分の能力の限界を思い知った。しかし、そういった失敗を冷静に判断し、うまくいかなかった理由が、「教養」や「表現力」の欠如であり、「人と話をするときに自分が何か知っていることがないと」会話というものは成立しないと思うようになった。また、本当の気持ちをジェスチャーを交えながら伝えることが重要であることを実感したようである。

確かに、初めて出会った人との会話のなかでは、出身国や専攻分野、趣味などさし障りのないトピックから始めるのがよくみられるスタイルではあるが、真に仲良くなりたければそれ以上の深い話、歴史や政治の話や自分の意見・考えを述べる必要があるであろう。そうすると、英語能力以外のいわゆるコミュニケーション能力も必要であろうし、日本人のように以心伝心、で黙っていても気持ちが伝わることは期待できない。研修後のAの口からは、「伝える」という言葉が多く発せられ、人に自分の気持ちを伝えることがいかに重要であるかを認識したようである。それが「積極性に欠ける自分」を克服する一歩となるということを学んだのではないだろうか。

人間関係の構築

Aは、プログラム参加によって他の参加者と思い出を共有したい、また、現地で積極的にコンタクトを取り、連絡先を教えあいたいなど他人との繋がりを広げたいと期待していた。プログラム参加者の上級生が下級生を思いやっている姿をみることによって、人と接するには配慮が必要であること、親しくなりたかったらまずは自分のことをちゃんとと言わないとわかってもらえないことを感じた。よりよい人間関係を築くには、積極的に行動するだけでなく、相手がどういう状態であるかを感じ取ったり、自己開示も必要であると理解するようになった。

参加者や現地の学生との接触を通し、友人関係を築くことの難しさを経験しつつも、「伝える」こと「思いやる」ことでそれを乗り越えられることを学習したようである。

最後にAは、今回団体でプログラムに参加し、行動しつつも、最終的には留学や海外研修というのは、「結局はひとりでやることは大事」で、「人任せではなく」責任感を持って行動することが必要であると締めくくった。帰国後は筆者が提供する国際交流関係のイベントに積極的に参加する姿勢がみられ、「与えられてきたことをやってきた」自分から一歩前進したようである。

3-2 B についての PAC 分析

B の研修前と研修後のデンドログラム (図 4、図 5) とクラスターごとの解釈を以下に示す。

3-2-1 B (研修前)

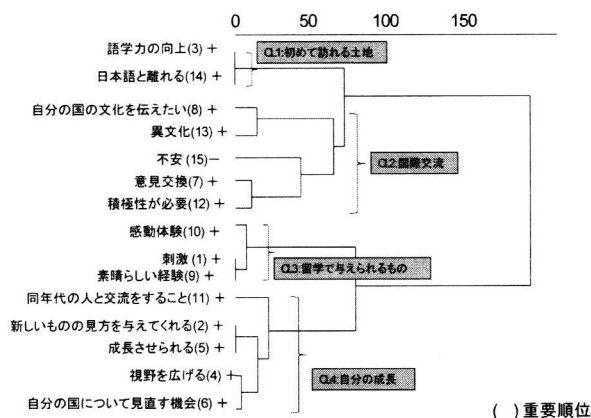


図 4 B (研修前) のデンドログラム

住んでいて、得ている情報とかも全然違って。きっと考え方もすごい違うと思うんですよね。自分の視野をかなり広げてくれる機会じゃないかなと思ったんです。

3-2-2 B (研修後)

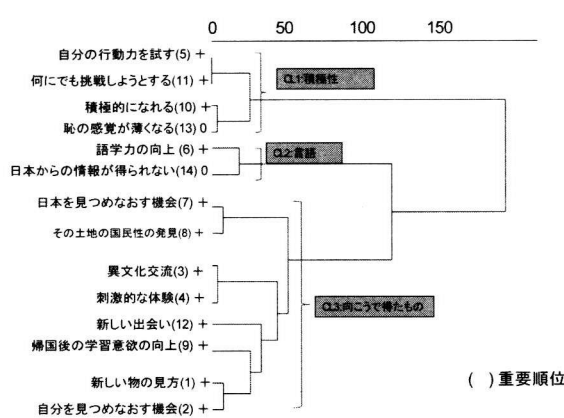


図 5 B (研修後) のデンドログラム

【クラスターごとの解釈】

CL1 (初めて訪れる土地) : まず、留学ということで、違う国、最初に出てくるのは、日本語と自分と離れますよね。

CL2 (国際交流) : さっき言葉があったんですけど、次はやっぱり文化。話し方とかいろいろ違いがあるので。まず自分たちのほうはどうか、ということと。意見交換がすごいしたいなと思っていて、どこが違うか、一緒か。そのためには積極性が絶対重要だと思って。今でもできるかというところちょっと不安。

CL3 (留学で与えられるもの) : 留学となると文化を学んだり、言葉を学んだりということが一番で。外国に行くことで、その土地の有名な建物だったり、美術だったりを見る機会をほしいなと思って。そこで、感動をすごいしたいなと思っているのと。文化と関係、刺激を受けるというのが。素晴らしい経験になるんだろうなと思っています。

CL4 (自分の成長) : 自分の国とは違うところっていうのは気になっているところなんですけども。自分と同じ年くらいの人たちがどうしているかということを知りたい。それはすごい、全然違う国に

【クラスターごとの解釈】

CL1 (積極性) : 自分の中の変化っていう感じです。

CL2 (言語) : 日本からの情報が得られなかったことが、語学力の向上に繋がるんじゃないかと思います。

CL3 (向こうで得たもの) : 現地で得ることのできた、語学力の向上以外の面です。

3-2-3 B についての総合的解釈

B の留学・海外研修イメージは研修前と研修後では A ほど大きな変化はみられなかったが、様々な体験をすることで項目がより具体的、明確になったようである。

オランダ人に対するイメージ

B は、国際問題や環境問題などについて「意見交換」をして、日本とオランダの違いを認識したいという希望があった。「ヨーロッパの人たちのほうが、考え方が進んでいたりして」とある種ヨーロッパ人のほうが日本人よりも優れているというイメージがあったようである。現地での交流を通し、視野を広げ、成長するため研修中は、授業の合間などに積極的に話しかけ、考え方の違いや生活習慣の違いを学んだ。ところが、

現地到着直後に起こった「ジュース事件」(項目 8「その土地の国民性の発見」)に代表されるような刺激的な体験によってやや理想的であったオランダ人像が崩れ、いいところもそうとは思わないようなところも発見し、オランダを客観的にみられるようになった。

自己の意識変化

その後は自分がそれまで思っていた当り前のことが毎日のように覆され、視野の狭かった自分に気づき、「違う角度でひとつのことを考えたり」、「新しい考え方を身につけること」ができた。さらには、オランダの文化を日本におきかえて考えたり、当たり前に来てきたことに疑問を持ってみるなど違う角度から物事をみることができるようになった。

積極性に関しては B も A 同様、研修前は「がつがつ」していない自分、「何をするにも受身がちになって」しまう自分であったが、意外に行動力のある自分に驚き、それを楽しみ、自信をつけたようである。それを後押ししたのが現地に「日本人が少なかった」ことと、「まわり外国人だけっていう状況」であり、「多少変な英語を使っても」、「外国人だからゆるされる」という環境であった。さらに、現地の「一生懸命燃えている」学生を見て、自分のこれまでの授業への取り組み方を恥ずかしく感じ、帰国後は真面目に授業に受けようになったと述べていることから、日本での学業生活に前向きになるきっかけをつかんだといえる。

語学力の向上については、重要順位が研修前より低くなっていたが(3番目から6番目に後退)、滞在中には語学力の向上はあまりしていないと認識し反省しつつも、語学よりも「他のことがもっと刺激的すぎたことが B にとっては大きな収穫であり、財産となったようである。新しい物の見方を実践したり授業への取り組み方が変わるなど、研修の効果はあったといえる。ただ、研修前に希望していた長期留学については、PAC 分析後に「自分には語学力がまだ足りないので、今の時点では無理だと思う」と発言しており、短期研修の参加によって自分の能力不足を実感したようである。

日本人との相互作用

B は研修前は、現地の人との積極的な交流を目的の一つとしており、語学の向上のためにも日本語は使い

たくないと言っていた。しかし、現地での体験のなかで新しい出会いがあったといい、それは日本から一緒に行った参加者との出会いであった。「短い期間だったんですけども、ずっと一緒に生活してたっていうことで、日本にいたらそんなに関わることもない人たちだったのに、いろいろ結構みんな深い話をすることもあって」と述べ、研修に参加することによって、それまでになかったネットワークを築くことができたようである。A も参加者同士の人間関係について言及していたが、助け合ったり、励ましあったり、また新しい人間関係を築くという点は、集団で参加する海外研修の利点ともなりえるだろう。

3-3 C についての PAC 分析

C の研修前と研修後のデンドログラム(図 6、図 7)とクラスターごとの解釈を以下に示す。

3-3-1 C (研修前)

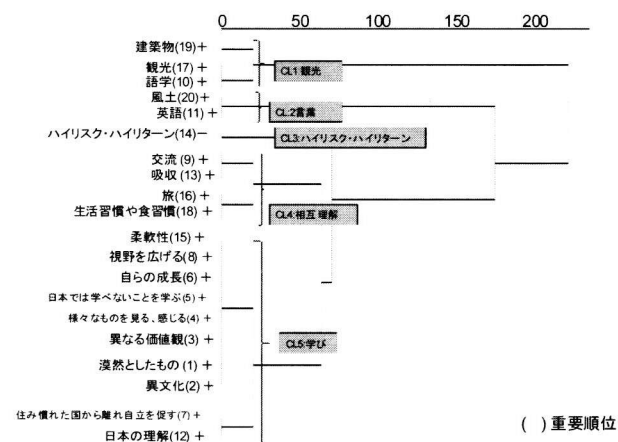


図 6 C (研修前) のデンドログラム

【クラスターごとの解釈】

CL1 (観光) : これは、留学、学びだけでなく、旅行みたいなそういう関心もほしいなと思って。日本とは全然違う建築物を見てみたいし。観光してみたい。

CL2 (言葉) : 英語は、なんていうか、国際語としてすごい重要だし、英語だけでなく、その国へ行くならその国の言葉も話さないと、っていうのは思います。

CL3（ハイリスク・ハイリターン）：吸収できるものもあれば、そのぶん何かを失うものもある、っていうか。海外は日本みたいに治安がよくないので。危険も伴うし、いいことばかりでない。

CL4（相互理解）：交流とか吸収は、日本人とは全然違うアイデンティティをもった外国人と交流して、交流するなかでなにかこう、吸収するものがあれば。そのなかで生活習慣とか食習慣とかも違うんで。

CL5（学び）：今までずっと日本っていう環境のなかで暮らしてきて、地域によって異なる文化を持っているっていう言葉は同じだし、食生活とか習慣とか同じなんで。またそれとは異なる違うものを見たいし、同じものごとでも価値観が違ったら違う風に見えたりするので。そういうのを学んでみたいです。

3-3-2 C（研修後）

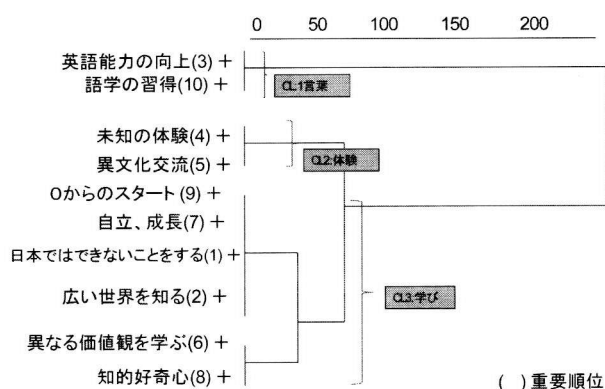


図7 C（研修後）のデンドログラム

【クラスターごとの解釈】

CL1（言葉）：海外に行くにあたって、英語は将来的にもどんな仕事についても必要になってくると思うし、これからやっぱり大事な言語なんで、それを習得するのはもちろん、英語圏以外の国に行くんだったら、その国の言葉を学ぶのも大事だと思うんで、言葉が通じるっていうことはその国の理解にもなるし、住んでいる人とのコミュニケーションを図ることもなるし。大切なことだと思います。

CL2（体験）：日本に住んでたらあんまり外国人もそんなにいないし、とどされた国のようであるし。あま

り他の国のことも知らないし。オランダに行って驚いたこととか、日本ではこういうのはない、って思ったことがすごく多かったんで、違う文化とか日本にはないものとか、今までに知らないものとかも知って、その国の人々に日本のことを教えてあげたらいいのではないかと思います。

CL3（学び）：せっかく外国にいつているんだから、外国での日本と違う価値観とか考えとか学んで、日本ではできないこともできるし、違う世界も見れるし、それによって何か自分の新たな一面が見えてきたりとか、それによって成長できたりとか、自立することも大切です。

3-3-3 Cについての総合的解釈

Cは、研修前に20あった項目が研修後には10に減少しており、「観光」、「建築物」の項目が消えていた。研修前は、留学や海外研修の目的が漠然としたもので「どれが一番かっていわれると、分らないし、何をしたいか、っていわれてもたくさんある」と述べていたが、自分の中でそれらのイメージがより明確になったものと考えられる。

研修前の期待

研修前のCの言葉からは「違う」という単語が多く出され、オランダやヨーロッパが日本と大きく違うものであることを前提として物事を考えているようであった。建物、土地などの目に見えるもの、気候や食べ物などの五感で感じられるもの、そして人々の考え方や価値観など一見目には見えないものも日本とは異なっており、それらを学びたいと考えていた。それを柔軟性のある若いうちに海外に行くことによって視野を広げたり、新しい考えを身に付けたりできるようになりたいと期待していた。他方で、吸収できる代わりに失うものもある、とネガティブなイメージももっていたようである。

また、留学や海外研修は自立を促したり、自らの成長が期待できる機会であり、言葉の通じにくく、家族のいない海外で頼る人もあまりいない環境で「自立を経験しておくのもいいな」と考えていた。

現地での体験

Cは建物や風景など日本と異なるものを発見したり、現地の人に英語で道を聞くことができるようになったことで自分自身が成長したと感じたようである。また、現地で驚いたこととして、海外の学生の真面目さを挙げていた。授業中にメモをとったり、寝ずに起きて授業を聞いている場面に遭遇したことは新鮮だったようである。さらに、日本では同じような人が多く、島国のため他の国とのつながりがないが、海外では広い世界を知ることができる」と述べた。また日本人の控えめで、積極的でない性格について触れ、海外では外国人と接することによって異なる価値観を学べることができると述べており、海外研修の意義を見出している。

留学、海外研修の意味

今回の海外研修では、「大人数だし、頼れる人も多いし、先生にお世話になることも多かった」と述べ、事前に考えていたほど不安要因はなかったようである。しかし、半年以上の長期留学については、「0からのスタート」であるとし、日本人がほとんどいないところで、「今ある生活とはちがう新たな人生を始める」くらい大変なことであり、「日本ではつい甘えてしまうことでも海外で生きていくってことは厳しい」と実感したようである。

また、長期留学の意味として、知的なものに対する好奇心を持つもの、「自分の研究をしたくて行くんだったら日本より進んだ研究をできる」と述べ、海外研修とは区別して考えている。研修前に長期留学も視野に入れていたCは、「専門を特に外国の大学で勉強しなくても自分の大学でできるのではないか」とPAC分析後に答え、留学の意味を改めて考え直すきっかけとなったようである。

4 総合的考察

以上、海外研修プログラム参加者A、B、CのPAC分析による研修前後の留学・海外研修イメージの変化をみた。3名の事例だけでは一般化することはできないものの、PAC分析の特徴である「個」の内面を構造化することはできたと考える。以下では、現地での

様々な体験とそれによって起こった態度変容や意識変容、海外研修と留学についての研修前後のイメージの変化をまとめながら、海外研修の効果と意義について考察する。

4-1 自己の振り返りと成長

本研修の効果として、参加者の自己への振り返りが起こったことが挙げられ、これまでの研究調査結果を裏付けるものである。Aは研修前から「自分をみつめる」ことや自分の限界を知ること、「自分の今置かれた位置を知る」ことを研修の目的の一つとして考えていたが、実際に研修に参加することにより、コミュニケーションスキルの不足を認識し、教養、思いやり、体力、チャレンジ精神などが留学には必要であると実感した。また、Bは自分の英語能力不足を感じ、今の状態であれば長期留学は難しいという判断を下している。

ネガティブな振り返りがあった一方で、自分自身の自立や成長を実感する経験もしたようである。Aは、積極性に欠ける自分であったが、自分からいろいろやってみることで達成できたと述べ、自己実現できたと感じた。Bは、自分にはないと思っていた行動力が自分のなかに存在するということを発見し、積極的に行動することでさらに視野を広げたようであるし、さらには、「一生懸命燃えている」学生を見て、自分を見つめなおし、自分のこれまでの授業への取り組み方を恥ずかしく感じ、帰国後は真面目に授業に受けるようになったと述べている。Cは、オランダについた当初は外国人と話をすることができなかったが、英語能力は十分でなくても気軽に道などを聞いたりできるようになった点が進歩したと述べていた。

海外では語学面や生活面で不便なことがある一方で、日本でしなければならないルーティンワーク、時にはストレスとなる人間関係、自分をみている周りの目などから解放され、自由な時間が与えられ、冷静になって自分を見つめなおすことが可能となるのかもしれない。3名とも研修前に持っていた期待や希望をある程度実現することができたことはプラスになるであろう。海外研修は、そういった振り返りや成長を実感するこ

とで、帰国後の大学生活や将来のキャリアパスを真剣に考えるとともに、やればできる、という自信をつけるよい機会であるといえることができるだろう。

4-2 海外研修での異文化体験

Zamastil-Vondrova (2005) は、アメリカ人学生が参加した 3 週間程度のチェコへの海外研修では、参加学生の異文化への気づき、自文化への振り返りなどの効果はみられたが、カルチャーショックはほとんど起こらなかったと述べている。本研修も期間が 3 週間と短期間であったが、文化差がそれ以上に大きい日本とオランダの間ではカルチャーショックは起こりえることかもしれない。カルチャーショックとは、自分にとって馴染みのない新しい風土や生活圏に暮らしたときに体験する違和感や心身症状を伴う心理的な衝撃あるいは強いストレス体験である（石井他編、1997）。今回の調査ではカルチャーショックという言葉は学生の言葉から発せられることはなかった。しかしながら、B の「ジュース事件」や C の現地の学生が授業中にメモをとったり、寝ていないことに驚いた経験から考えると自文化が揺さぶられるような衝撃を受けたといえる。研修前には、3 名ともオランダを日本とは全く異なる国・文化であると認識していたが、想像をはるかに超える異文化体験をしたのであろう。

C は、日本が閉ざされた国で同じような人が多いと述べていたが、日本でも近年外国人比率が高くなっており、同じような人ばかりとはいえないだろう。さらに B と C は、現地で勉強していた学生の授業中の真面目な姿勢や居眠りをしないことに驚いていたが、こういった異文化体験は日本の大学でもすることができる。それは滞日外国人留学生から出される日本人学生の授業態度の悪さについての厳しい意見（上原、1998）を聞くことであり、彼らとの接触によって容易に体験することができる。B のように自分の行動を見直したり、さらに一步踏み込んで、何故日本の大学では学生が居眠りをするのか、学生は積極的に授業に参加しないのかなどについて疑問を感じる、あるいは、日本にいる外国人留学生や外国籍住民と積極的に交流を図り議論をすることによってさらに大きな研修の効

果となるといえるだろう。

4-3 海外研修と留学の違いの認識

研修前に長期留学を希望していた B と C は、研修を終えて、長期留学についてはやや消極的な意見をもったようだ。本研修の目的の一つである本格的な留学への動機づけを与えることには繋がらなかった。ただ、B は自分の語学能力が十分でないことが実際に体験できたし、C は漠然としていた長期留学の意味や目的を明確にすることができたという意味では効果はあったものとする。

3 名とも今回の研修は長期の留学とは違うこと、留学のほうがより困難であることを認識したようである。それは、研修後の A の「お世話してもらっているプログラム」、「留学やったらもっと大変」、C の「今回だったら大人数だし、頼れる人もいるし、先生にお世話になることも多かった」、「海外で生きていくっていうことは厳しい」という発言からも理解できる。

本研修は、日本から随行する教員と現地のグローニンゲン教育研究センター教職員の充実したサポート体制があり、困った時にはサポートしてくれたり、わからない時にはすぐに質問できるような環境であった。また、海外研修では多くの時間を他の参加者と団体行動することが基本である。共に研修に参加した日本人との相互作用については、3 名とも関わりや存在の重要性を述べていることからプラスに働いていることが示唆された⁷。1 年の長期留学者が日本人との積極的な接触をネガティブイメージと判断していることと異なる（高濱、2006）。初めて海外に行く学生や、親元から大学に通っている学生などにとっては、いきなり長期の留学に行くよりも、まずこのような海外研修に参加することがよいのかもしれない。海外研修は留学の一部を体験できることから、長期の留学につなげる可能性のあるプログラムであるといえるだろう。

5 おわりに

3 名の事例から、海外研修のような短い期間の滞在であっても異文化に接することによる意識の変化が起

こりやすいことが実証された。将来的なプログラム継続に向けた課題としては、参加者への継続的調査、それを基にしたプログラム内容の改善、オリエンテーション内容の質的向上、参加者の帰国後のフォローアップ支援の検討が重要である。

注

1. 本プログラムは、文科系学部生を主な対象としており、8月下旬から9月中旬にかけ三週間あまりをグローニンゲン大学での英語授業参加、専門科目の聴講、オランダ都市見学、現地学生との交流などを行い過ごす。参加者の定員は20名である。詳しくは、本誌別稿「短期海外研修のプログラム作りと課題—大阪大学グローニンゲン大学短期訪問プログラム実践報告」に掲載されている。
2. 筆者は、本プログラムのコーディネーターを務めたため、参加学生のバックグラウンドは申込み書によりある程度把握していた。コーディネーターの役割として説明会、オリエンテーションなどを行い、日程の初期10日間は学生の引率を行った。
3. 今回の調査では、土田先生からツールソフトをお送りいただき使用した。
4. 解釈にあたっての筆者の補足は、協力者の発話を理解するためのものであって、否定したり異なった解釈をするものではないことからPAC分析の手法に則っていると考える。
5. CLのあとに続く括弧（ ）内はそれぞれ協力者によって命名されたものである。「Q:」に続く発言は、筆者による質問を示す。また、非言語的反応については、「？」は疑問、「笑い」は笑いを示す。その場の臨場感や協力者の内面を分かりやすくするために、できるだけ調査協力者のことばを忠実に再現した（内藤、2002）が、反復している箇所やいいよどもなど省略した部分もある。
6. Aは研修前のTOEICのスコアが900点以上であった。

7. 永井（2007）が海外短期研修の参加者に提出させたレポートでは、集団で参加することによって互いに競争して伸びることができるという利点が述べられている。

参考文献

- 藤澤良行・小森道彦（2005）「中期語学留学プログラムの英語学力への効果に関する研究—日本の大学英語教育への提言—」、『大阪樟蔭女子大学論集』、第42号、pp.35-47
- 古屋則子（2005）"Evaluating a Short-Term Study Abroad Program"、『文化女子大学紀要人文・社会科学研究』、13、pp.19-30
- 井上孝代（1998）「カウンセリングにおけるPAC（個人別態度構造）分析の効果」、『心理学研究』、第69巻第4号、pp.295-303
- 石井敏他編（1997）『異文化コミュニケーション・ハンドブック』、有斐閣
- 内藤哲雄（1993）「個人別態度構造の分析について」、『人文科学論集』、27、pp.43-69
- 内藤哲雄（2002）『PAC分析実施法入門[改訂版]：個を科学する新技法への招待』、ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸太一編（2008）『PAC分析研究・実践集1』、ナカニシヤ出版
- 中川典子（2008）「短期アメリカ語学研修における参加者の学び—PAC分析による調査結果から—」、『2008年度異文化間教育学会第29回大会抄録集』pp.110-111
- 永井智香子（2007）「第1回中国語海外短期語学研修実施報告—参加学生が書いたアンケートとレポートを中心に—」、『長崎大学留学生センター紀要』、第15号、pp.17-28
- 野中辰也・田中ゆき子・隅田朗彦（2001）「短期語学留学プログラムの効果測定（1）」、『新潟青陵女子短期大学研究報告』、第31号、pp.71-78
- 大塚賢一（2007）「短期海外語学研修は学生を変えるか？—英語力と学習不安に関する調査からの検証（予備調査）—」、『茨城工業高等専門学校研究彙報』、第42号、pp.29-36

末田清子（2001）「留学体験の意味づけー大学生の留学前及び帰国後の滞在国に対するイメージ分析を通してー」、*Journal of Intercultural Communication*、No.4、pp.57-74

高濱愛（2006）「短期交換留学プログラムによる派遣留学の効果と意義を考えるー派遣留学体験記の分析からー」、『大学教育研究紀要』、第2号、岡山大学留学生センター、pp.31-38

徳井厚子（2002）「短期語学研修におけるコミュニケーション意識とイメージの変化ーユタ大学夏期英語研修プログラムの事例ー」、『信州大学教育学部紀要』、No.107、pp.25-33

上原麻子（1998）「2 留学生の生活と教育」、『岩波講座現代の教育第11巻 国際化時代の教育』、岩波書店、pp.203-223

矢内結香（2007）『短期海外研修担当者のためのハンドブック』、茨城大学

Zamastil-Vondrova, K. (2005) "Good Faith or Hard Data? Justifying Short-Term Programs", *International Educator*, NAFSA, pp.44-49

資料

文部科学省（2007）「我が国の留学生制度の概要 受け入れ及び派遣」平成19年度文部科学省高等教育局学生支援課

JASSO（独立行政法人日本学生支援機構）（2008）「平成18年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」

http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data07_s.html

謝辞

本研究にあたりご協力いただきました学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

【各項目の解釈】

A（研修前）

- ①思い出を他人と共有する：大学に入って結構忙しかったので、同年代の人とか、あるいは先輩とかと長時間同じことをする機会っていうのがなかったの。違う場所に行って。
- ②他人との繋がりを広げる：普段では友達になれそうにない人とか積極的にコンタクトをとる、連絡先を教えあう。
- ③他人を喜ばせる：これは、やっぱり自分の親とかに、今まで色々「こうだね」といわれてきたこととか。考えてみると、自分がこのプログラムで何かを得ることで、例えば何かが変わったとするとそれは、親の期待？でもないけど、何かそれに応えることになるんじゃないのかなと。（Q：両親は今回の研修も喜んで送り出してくれている？）一応はがんばってきたら、みたい。
- ④遊び、楽しむ：自分がほんとにヨーロッパに行ってみたくて。歴史があるいい場所にいくので。
- ⑤わくわく体験：全く知らないところに行くので、なんでも新しいこと。友達と話し合いながらいろんなことを経験したい。
- ⑥日常から脱却する：毎日学校に行って、家でなにかして、という生活から変わるので、今のことを一時は忘れて、そこでしかできないことをやりたい。
- ⑦興味を広げる：今もなかなか時間がないので、博物館とかばっかり行ってるわけにいかないの。新しい興味が広がるんじゃないかと。
- ⑧知識を増やす：やっぱり英語をやってるけど。日本にいただけでは分からないこと。全く知らないことを、例えば英語、ものの考え方とか色々知りたいです。
- ⑨考える力を付ける：やっぱり色々、自分ひとりで選択したりとか、しないといけないこととかあると思うし、今こっちをととこうとか、日本では起こりえないことに対して考える力を鍛えることができればと思います。
- ⑩自分の限界を知り、目標を書き換える：なんとなく自分についてのイメージははっきりしてきてるんですけど。また違うことにぶつかればもっとはっきりするんでないかな、と思います。
- ⑪生活に区切りをつけ、新たな出発点にする：2回生も真ん中まで終わってちょっと今までのやり方ではいけないかなと思っているんで。一回区切りにして、違うことも見れるようにしたい。（Q：今のままではだめだと思っている？）結構忙しくて、与えられたことをやってきた。考える時間にしようかなと。
- ⑫自分の今置かれた位置を知る：将来どんな仕事につくかちょっとわかりづらいんですけど。ひょっとして英語を生かして将来やっていくとなると。海外から見たらどうなるんだろうとか。そういうことを杓を広げたいと思います。
- ⑬自分を見つめる：弱点とか、そういうところがある自分に対して、もう一回考える時間。家族とかとおらんとこで考えたい（笑い）。
- ⑭英語能力向上：どんだけ言っても英語は好きなんで。話す力も聞く力も色々つけて、これからの学習にも役立てられるように。
- ⑮将来に繋げる：英語の力があればひとつの武器になるかもしれないし。それを生かした仕事につきたいんで、スキルを磨いて、将来を真剣に考えよう。
- ⑯積極性：性格として一番多分苦手なのが、こう、「わ～」と人と話す。やむをえない状況に追い込まれたときどこ

で自分がやっていけるか。

- ⑰自己改革：自分からやっていく、とかそういうことを。自分を自分として見れるところで。
- ⑱恐怖との戦い：日本にいたら何も知らなくていいことだけど、海外にいくと、知らなければならぬ危険とか。積極性に欠ける自分としては、知らない外人にばつと話しかけるのは恐怖でもあるんで。
- ⑲表現力を鍛える：日本語でももちろんなんですけど、英語で何かを言おうと思ったときに、考えとかがまとまっていないといけなし、もっともっと磨きたい。今の学部の授業では受身の授業が多いので。
- ⑳自信を付ける：自分を色々考えて、ちょっとでも力が付けれたと思えたら。どこまでできるかわかんないけど。

A（研修後）

- ①体力：これは、何をやるにしても自分が元気じゃないと色んなことができないので、そういう鍛えたりするのも大事やし、体力が大事って。（Q：研修の経験から？）今回は、体力だけじゃないけど、時間を問わず相手の言うてくることに対応するには、それなりの準備というか、まあ、ガッツがないとだめだなと。
- ②リスク：何でもかんでもやってみようって思ってもできないけど、ある程度危険とか、ちょっとやってみようかな、っていう勇気でリスクを越えないと体験できないことはあるということ今回体験しました。
- ③勇気：なんか怖いな、と思ったときにもちょっと越えてみようかなというやる気が必要かなと思います。
- ④好奇心：知りたいな、とかやってみたいなという気持ちがあれば怖いことも怖くなくなると思うので、それを持っていることは、何に付けても重要な。
- ⑤チャレンジ精神：これをやったらああなる、こうなるって考える前にやってみようと思い組みでみることはある意味すごい自分にも欠けていることだなと思うので大事だなと思います。
- ⑥悩み・苦しみ：やりたいと思ってても実際にやってみたときに、「ああだめだった」とか、逆にやる前に悩むこともいっぱいあると思うので、その辺を苦しいって捉えるか、そういうもんだと捉えるかは、まあ自分次第ですね。
- ⑦コミュニケーション：言語の差があるから、逆に意識するんだと思うんだけど。人としゃべったり、人に自分を伝えていくのができないと、何の学びにもならないなというのは実感しました。
- ⑧教養：人と話をするときに自分が何か知っていることがないと。ただ単に「自分は何歳です」と言っても話にならないので、そういう素地が大事だなと思いました。
- ⑨思いやり：今回は、日本の20人のメンバーのなかでも、結構つらい思いをした子とか先輩らが思いやっているのを見たし、そういうのが大事だと思ったし。他の国籍の方でも、何に傷ついたり怒ったりするか分からないから、そういう配慮は必要かなと思います。
- ⑩感動：新しい人に出会ったり違う文化に触れることは心にくぐってくるものなので、とにかく知ろうとすれば、それだけ感動は大きい。
- ⑪表現力：何か言おうと思ってもうれしくてただ「ハッピー」だけでは言ったことにあまりならなくて、どうやってジェスチャーを交えながら、本当の気持ちを伝えるか、一歩間

違いは違うことが伝わってしまうので、大事だと思います。

- ⑫達成感：やって返ってくれば返ってくるだけこう自分のなかでうれしいことなので、失敗はあると思うけど、何かしないと得られないものなので、それを実感しました。
- ⑬自己実現：自分の目標も、やっぱり、自分から色々やってみるってことがあったので、それが達成できて、達成感が味わえれば、実現とまでいかなくても、ちょっとはなんか、自分としてクリアできたんじゃないかな、っていう実感が持てるのはうれしいことですね。(Q:実現できましたか?) 微妙やけど(笑い)……。これからの課題として、ありますね。
- ⑭英語力：言語、文法とか発音とか、聞く力、しゃべる力、とあとしゃべろうとする力とかひっくるめて、鍛えようと思わないと。それがあの人ほど恐怖心とかは少なく、海外行っても大丈夫だと思うので、やっぱり自分で鍛えよう、そう思いました。
- ⑮友人関係：コミュニケーションとかと全部繋がってくるんですけど。誰かと親しくなろうと思ったら、まずは自分のことをちゃんとと言わないとわかってもらえないから。そういう意味でしゃべったり、聞いたり。あちらが言うてくれることはちゃんと理解できないと、あっちの人にはおもしろくないからそういう理解出来ているってことも伝えないといけないので、友人関係っていうのは難しいな、って思いました。
- ⑯自律：海外行っちゃうといろんな人に出会うので、日本のなかにいるよりも。ある程度は自分のペースを守って、行っている場所とか、やっていること。「私はやりません」って言うことは、自分の生活がちゃんとしていないとだめ、と思ったのと。何をやるにしても結局はひとりですること。は大事。すぐ誰かに頼るんじゃなくて、一回はやってみて、できひんかったから「じゃあ頼むわ」みたいなほうが相手に評価してもらえるんじゃないかなと思います。
- ⑰自立：「自律」と同じです。
- ⑱処理能力：こんなお世話してもらっているプログラムでも思ったことは、自分で来た情報とかをその都度把握して、一応ストックしていかないとほんとに後で大変なことになるので。手続き一つとっても、例えば、留学やったらもつと大変やと思うので、ひとつひとつ、自分自身が把握して誰か人任せではなくてその場で処理できることが大事だと思います。
- ⑲期待と責任：海外行くとか、まだ日本では結構勇気があることの部類に入ると思うんで。そういう意味で周りの人の期待とか、自分が自分に対して期待することとかあるので、それとやんなきゃいけないこととかの責任感とかは、しんどいことだけど忘れなくてちゃんと毎日考えないと、それこそだらけてしまうと危険だなと。
- ⑳学習：やっぱり、留学っていうと、要するに、あっちの方の大学で勉強する、やっぱり勉強は主なんで。友人関係とかそういうことも一つの勉強だけど、違う環境でどこまで何を得てこれるかっていうのは、自分で復習したりとか記録しとかないと、結局なんだったんだらうっていうことになってしまうから。そういう意味でも処理しつつ、興味を持ちつつ、何を中心にやろうかなっていうのを選んで、やる。全部は無理やから選んでやる。そういう計画性も大事かと

B (研修前)

- ①語学力の向上：今、自分が一番興味があるものってやっぱり英語なんですけど。世界中に英語をしゃべれる人がいっぱいいて。自分はまだまだなので。英語を母国語としている人たちだけじゃなくて。母国語でないけれども、会話をして。
- ②日本語と離れる：日本語を使ってしまうと、語学力の向上、折角いい機会なのに、100%力を出し切れないと思うので。日本語は普段使っているものですので使いたくない、というのがあります。最大限に機会を生かして語学力を上げたいと思っているので。
- ③自分の国の文化を伝えたい：文化ってすごい意味が広い。自分が知っている日本っていうのが、違う国の人が、違っていてというのが楽しみ。こういう面もあってっていうことを知ってもらいたい。
- ④異文化：異文化、って最初にばって出てくるのは食べ物なんですけど。食べ物の違いって大きい。そういうことが今まであって。その経験から異文化というのが出てきて。
- ⑤不安：これはほんとに、絶対あると思うんですよ。日本語が通じないところで自分のたどたどしい英語で。どうなるのかなという不安があるんですけども。それよりも他の項目が気になっているのであまり大事ではない。
- ⑥意見交換：日本の国についてのことを聞きたいことと共通するんですけども。国際問題だったりとか、環境問題に意見を言う。自分の英語の力で議論ができるかわからないんですけども。外国の人と意見を交換するっていうのをがんばってしたいなと思ってます。
- ⑦積極性が必要：今、日本でこうやって大学生やっていると、すごい自分があまり「がつがつがつがつ」何がしたい、自分で進んでっていうことがあまりできていないと思うんですよ。外国では機会を無駄にしようと思うんで。多少失敗をしようが意見交換みたいなものを自分から進んで積極的にやってみたい。
- ⑧感動体験：意見交換して新しいものの見方を、ああそうだったのか、という風に。普通の会話とかでも感動できると思うし。町を歩いているだけでも感動できると思うんで。そこを逃さないように見つけて感動したい。
- ⑨刺激：日本がどう見られているか、共通の問題についてどう考えるとか。刺激を受けて日本に持ち帰って、それから自分が生きていくなかで大きな刺激になるんじゃないかなと思います。
- ⑩素晴らしい経験：ほんとに、不安とかあまりないので、とりあえず行って、たくさん刺激を受けたり感動体験をしたりで、自分の人生の中ですごくいい経験になると信じているので。
- ⑪同年代の人と交流をすること：日本にいたら、違う年代の人って意見が違うんですけども。外国に行くと意見が違うという絶対そんなことないし。環境問題とか、ヨーロッパの人たちのほうが、考え方が進んでいたりして。同じくらの年の人たちでもそんなことを考えているっていうのがみえるんじゃないかなと。
- ⑫新しいものの見方を与えてくれる：11と同じです。
- ⑬成長させられる：前の自分っていうのが、まだまだぜんぜん、もっともって考え方とかにも成長しないといけないと思ってるので。やっぱり留学して、こう学ぶことがあって。願望が入っているんですけども。
- ⑭視野を広げる：自分が今まで考えていたのと違った角度から物事を考えさせてくれる。自分で学んで、日本に帰って

きてから色んなところで生かせる。

- ⑮自分の国について見直す機会：世界からどう思われているか。日本はこの点はどうしているか。悪いことばかりじゃなくて、いいことだったりも。日本に戻ってから、何ができるってわけじゃないんですけども。日本の中にも違う、あそこはこうだ、とか日本はこうしているんだとか。
- ⑯自己改革：自分からやっていく、とかそういうことを。自分を自分として見れるところで。
- ⑰恐怖との戦い：日本にいたら何も知らなくていいことだけど、海外にいくと、知らなければならない危険とか。積極性に欠ける自分としては、知らない外人にばっと話しかけるのは恐怖でもあるんで。
- ⑱表現力を鍛える：日本語でももちろんなんですけど、英語で何かを言おうと思ったときに、考えとかがまとまっていけないといけないし、もっともっと磨きたい。今の学部の実業では受身の授業が多いので。
- ⑳自信を付ける：自分を色々考えて、ちょっとでも力が付けたらと思えたら。どこまでできるかわかんないけど。

B (研修後)

- ①自分の行動力を試す：日本にいるときは、ほんとに結構、何をするにも受身がちになって、自分から何かしないといひょうに動いていない、ということをやあまり考える人間ではなかったの。向こうにいくと、それは絶対にだめだと、頭では分かってたんですけど、だんだんもったいなく過しててと思ったんですよ。もちろんじっとしてても新しいことを見つけることはできるんですけど。自分で行動することでもっと得られるんじゃないかって。最初のころはびくびくして動けなかったんですけど、ちょっと慣れてきたら、アクティブにやってみたら意外とこんなに動けるんじゃないか、と思ったの。それが意外と自分は行動力があるんだと思うようになりました。
- ②何にでも挑戦しようとする：上と関連してると思います。
- ③積極的にになれる：日本人が少なかったのと、まわり外国人だけっていう状況で。多少変な英語を使っても、とか。「そんなこと分からないの」と思われそうなことでも、外国人だから許されそう。日本ではやらないようなこととか、積極的っていうか強気になったというか。日本ではなかった積極性が、向こうではなぜか持ってたっていうのはありました。
- ④恥の感覚が薄くなる：積極的と同じです。
- ⑤語学力の向上：行く前はこれが一番、向上まではしなくても、いっぱい刺激を受けて、向上も期待はしたんですけど、行ってみると、語学力の向上は結構こう、後回しになったっていうか、ちょっと言い方が悪いんですけど。重要度が高くて、他のことがもっと刺激的すぎて。語学力の向上はあんまりしてないと思います。
- ⑥日本からの情報が得られない：向こうに行ったら、全然日本からの情報がなくて、何が起きているか気にはなっていたんですけど。いざ帰ってきても時代に取り残されている感じがしたんで。シャットアウトされてるんだなと思いました。
- ⑦日本を見つめなおす機会：日本人はオランダの人はこんな場面でこういうことしてるけど、じゃあ、日本人ではどうだろうとか。公共の場所に行ってもこういう工夫してるけど、逆に日本ではあるけどオランダではない、そういう、なんか、物理的なところから人の考え方でも、やっぱり似

てるところもあるにはあるんですけど、それは全然違うな、と思って。今までは日本がこう、自分のなかではもちろん当たり前に過ごしてきたんですけども。それってほんとうに当たり前かな、っていうのをよく考えたことがありました。

- ⑧その土地の国民性の発見：行ってすぐに、レストランに入ってたんですけど、友達がオレンジジュースを頼んで、頭からオレンジジュースをかけられたんですよ。運んできたときに、「あっ」ってなって。全身オレンジジュースまみれになったんですよ。その店員さんはすごい謝ってくれたんですけど、うしろの店員さんが大爆笑してずっと笑ってるんですよ（笑い）。「えっ」って、思ったんですよ。それは悪い、悪いっていうか、あまりいいとは思わなかったところなんですけど（笑い）。道を歩いててちょっと分からなくなそうにしてると、すぐに声をかけてくれたり。オランダの人の性質を色々知れた気がしました。
- ⑨異文化交流：向こうの大学生とかとちょっと授業の合間とかに話しかけて、日本についてどう思っているとか、オランダではこういうときにどう考えるとか、をそんなにいっぱいはいしゃべれてはいるんですけど、機会をみつけてはやってみて。考え方の違いだったり、生活習慣の違いだったりとか、学べたと思います。
- ⑩刺激的な体験：基本全部かなり刺激的だったんですけども。さっきのオレンジジュースをかけられたのもそうだし。やっぱり違うところは色々あったの。当たり前だと思っていたことをかなり覆されたことがいっぱいあったの。それが毎日だったんで。
- ⑪新しい出会い：現地の人もそうだし、留学に来てた人もそうだし、おしゃべりすることができて、それがすごいよかったと思ってるんですけど。それもだし、日本で一緒に行った人たちも、短い期間だったんですけども、ずっと一緒に生活してたっていうことで、日本にいたらそんなに関わることもない人たちだったのにいろいろ結構みんな深い話をするということもあって。それも新しい出会いというふうに思います。
- ⑫帰国後の学習意欲の向上：英語をがんばらないと、というのもあるんですけど。むこうの大学生の授業の受け方とか、すごく感動して（笑い）。今まで私はどんな授業の受け方をしてた、何をしてたのかと思って。こんなことではだめだと思って。同じくらいの年の子は、こんなに一生懸命燃えているのに。燃えているっていうか、当たり前っていうか。恥ずかしかったって言うか、もっと大事にしないといけないなと思って、帰ってきても真面目に授業を受けるようになりました（笑い）。
- ⑬新しい物の見方：日本では気づかなかったけど、日本ではこういうのがあって、オランダではどう考えているとか、かなり私は視野が狭かったんだと、向こうに行ったら。まだまだ日本のことも全然知らないの。向こうで新しい考え方をちょっと身につけることができたんじゃないかなというのもそうだし。日本に帰ってからも、今までとは違う見方で物事を捉えるって言うか、違う角度でひとつのことを考えたりとか、今まではしなかった考えをするようになりたいなと思うようになりました。
- ⑭自分を見つめなおす機会：授業の受け方と繋がっているんですけど。自分もこれでいいのかなとか。自分が今までそんな人間じゃないと思ってたところが、そういうこともできたり、向こうで考えることができたかな、と思いました。

C (研修前)

- ①建築物：国には国の特有な建築様式があって。日本だったら畳とか瓦とかそういうのがある分。ヨーロッパだったら石造りとかレンガだったりとか。アジアも素敵なものがあるんですけど、私はヨーロッパに興味があるんで、オランダだったら風車。
- ②観光：いろんなものをみて楽しんで食べて、そういうことです。
- ③風土：気候とか、気温とか、土地土地によってまた特有なものがある。そういうのがまた、どうかなっていうのはあります。
- ④語学：やはり、世界中の人と関わっていくんだったら欠かせないものであって。それが目的ではないけれど、相手を理解するためのツールとして持っておくべきもの。
- ⑤英語：語学の中でも母国語ではなくても英語を話せる人々が多いので。英語が話せると英語を話せる人とコミュニケーションが取れるので。
- ⑥ハイリスク・ハイリターン：いいこともあれば悪いこともある。
- ⑦交流：これから外国人と接する機会も多くなると思うので、そういうときにどのように対処すればよいか、身につけて行きたいと思うし。同世代の人であっても、考え方とか違ったりするし、もっと世代が違えばさらに学べるものとかも。日本人のなかでもあるので外国人だったらよけいもっとある気がする。人間関係のなかで学べるものを学びたい。
- ⑧吸収：自分の外にあるものはすべてこう・・・。(Q: 吸収したい?) 出来ないんですけど(笑)、いろんなことを知っているほうが人間として豊かな気がするし。やっぱりいろんなことを知りたいっていうのはあります。
- ⑨旅：私の中では旅行とは違うんですよ。一人旅とか、見ず知らずのところにいたり。新たな発見があるものです。
- ⑩生活習慣や食習慣：国が違えば生活習慣も違うし、食べ物も違うし、日本でいてもテレビ見て知っているのもあれば、その国に行かないと知らないのものもあるし。
- ⑪柔軟性：海外に行くのは若いうちによいくいうじゃないですか。若いほうが柔軟性があるし、ことばもそうだし、適応能力があって・・・。知らない土地に行くにはその文化に適応するだけの柔軟性が必要だと思います。
- ⑫視野を広げる：日本だけでなく広い世界を見たい。
- ⑬自らの成長：そういう人だけでなくいろんなものからも学んだことで。新しい考えが身についたり、違う方向から物事をみられるようになったり。なにかしら自分のなかでは変化が期待できるのではと思います。
- ⑭日本では学べないことを学ぶ：この辺りは似ている。15、12、14は同じような感じ。日本っていう狭い国にとどまるのじゃなくいろんなことを知りたいと思います。「異なる価値観」と「異文化」も同じで。日本とは異なる文化、歴史、背景、そういうのがあるんで、日本とは違った文化とか学びたいです。
- ⑮漠然としたもの：目的と言われても、これですとはっきり言えるものはないですね。(Q: 今度の研修?) はい。たくさんあるんで、どれが一番かっていわれると、分からないし、何をしたいか、っていわれてもたくさんあるし、みたいものもたくさんあるし一つではないし。
- ⑯住み慣れた国から離れ、自立を促す：日本にいと何でもあるし、言葉も通じるし、家族もいるし。親に甘えて生活しているので。頼る人があまりいない土地で自立を経験しておくのもいいなと。
- ⑰日本の理解：外国のことを学ぶ前に日本を知っておかないと比較もできないし、海外の人に聞かれてもこたえられないっていうのも恥ずかしい。日本の文化習慣とか、そういうのを知っておいて、海外に行ったりするのがいいと思

います。(何かしてる?) 歴史が好きなので、京都とか行きたいなと思って。お土産に何か日本らしいものを持って行きたいなと思います。

C (研修後)

- ①英語能力の向上：留学するからには英語は身につけるべきだと思います。
- ②語学の習得：英語が一番なんですけど、英語圏でない国に行っているのに英語しかしゃべれないっていうのはやはりおかしいような気もするし、その国の言葉もある程度しゃべれるようにならないと生活するときでも不便ですし。
- ③未知の体験：色々驚いたことはありました。海外の学生はすごい真面目ですし、授業中とかもメモをとったりとか、日本の学生みたいに寝ている人とかいないし。そういう、大学の中でも驚いたことがあったし。建物とか風景とかも日本とは全然違って初めて見たようなものもありました。
- ④異文化交流：オランダにも他の国から留学に来てて、話したりしたときに日本ともオランダとも違う文化を持っているし、それを教えてもらって興味深く聞いたり。私も日本のことを話すと留学生たちも興味深く聞いてくれたんで。そういう他の国の人々と交流で得るものがあるのではないかと。
- ⑤0からのスタート：海外へ行ったら、今回だったら大人数だし、頼れる人も多いし、先生にお世話になることも多かったんですけど。長期だったら一人で行ったり、現地で日本人がいるかどうかくらいなんで、誰もいないところで言葉もそんな話せない状態から始めるっていうのは、日本で今ある生活とはちがう新たな人生を始めるっていうことには進歩ではないかと思っています。
- ⑥自立、成長：海外に行くことによって色々体験したり、見たり聞いたり、知ったりして、今までとは違った考え方とか行動とかもできるようになったりするので、自立したり成長できたりするのではないかと思います。(Q: 今回は?) 最初オランダに着いたときには、電車の中でも他の外国人と話したりできなかったけど、最後のほうは町で外国人に話しかけられても、英語は得意ではないので難しい話をしたりするのではないけど、挨拶したり軽く話したりできるようになったので、道を聞いたりする時も気軽に聞いたりできるようになった。そういうのは自分のなかでは進歩でした。
- ⑦日本ではできないことをする：留学だったら、自分の研究をしかて行くんだしたら、日本より進んだ研究をできるし。日本だったらつい甘えてしまうことでも海外で生きていくっていうことは厳しいし、日本の甘い環境から脱して、海外で頑張れるっていうかそういうことです。
- ⑧広い世界を知る：日本は結構狭いし、あんまり外国人の方もそんなにいないんで、閉ざされた国、同じような人が多い国なんで、それほど他のこととかが分からないし。島国なんで他の国とのつながりもないと思うので。いろんな人がいるっていうことも知れると思います。
- ⑨異なる価値観を学ぶ：日本人は控えめっていうか、人前であまり「がしがし」いかないし。日本では当たり前のことでも、違う国ではおかしいことであったり、海外では当たり前なことでも日本ではありえないことであったりするので。そういう価値観を学べるとと思います。
- ⑩知的好奇心：好奇心を持つことはいいいことだと思うんですけど、海外に行くっていうことで知的なものに対する好奇心を持ったうえで留学になると思うので。いろんなことに目を向けてやってみようという好奇心、やる気、意欲を持つことは重要だと思います。